会議記録

会 議 名	平成２８年度　第３回　杉並区文化・芸術振興審議会
日　　時	平成２９年１月１０日（火）午後６時００分～午後７時２３分
場　　所	杉並区役所　西棟８階第９会議室
出 席 者	〔委員〕佐藤信（会長）、板倉徳枝、菊地一浩、後藤朋俊、坂根シルック、谷原博子、中村陽一、花柳琢兵衛、ヤマザキミノリ、米屋尚子 〔区〕文化・交流課長（幸内正治） 〔事務局〕文化・交流課
欠 席 者	鈴木伸一
配布資料	資料１　第２回杉並区文化・芸術振興審議会自由意見の要旨 資料２　東京２０２０大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ） 参考資料　まちなかギャラリーマップ２０１６ 参考資料　すぎなみアートさんぽ２０１６　イベントマップ 参考資料　すぎなみ地域大学　講座案内 参考資料　助成金事業のご案内（２件）
会議次第	〔議事〕 １　開会 ２　報告事項 （１）第２回杉並区文化・芸術振興審議会自由意見の要旨 （２）東京２０２０大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ）の提示 ３　その他
主な発言	別紙のとおり

発言者	発言内容
	ー　開会　ー　　（午後６時００分）
	１　開会
文化・交流課長	定刻になりましたので、平成２８年度第３回杉並区文化・芸術振興審議会を開催いたします。これより議事進行は会長にお願いいたします。
会長	今日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。では早速、第３回の杉並区文化・芸術振興会議を開会させていただきます。 まず、事務局から資料等のご説明をお願いします。
文化・交流課長	傍聴者は、本日はいらっしゃいません。 それでは、資料の確認をさせていただきます。 まず、資料１として「第２回杉並区文化・芸術振興審議会自由意見の要旨」、資料２として「東京２０２０大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ）」をお配りしております。また、参考資料として４点座席に配付をしております。まず「まちなかギャラリーマップ２０１６」、それから「すぎなみアートさんぽ２０１６　イベントマップ」、続いて、「すぎなみ地域大学　講座案内」「助成金事業のご案内」２点でございます。資料は以上です。
会長	ありがとうございました。みなさま資料はよろしいでしょうか。
	２　報告事項 **（１）　第２回杉並区文化・芸術振興審議会自由意見の要旨**
会長	次第に従いまして報告事項「第２回杉並区文化・芸術振興審議会自由意見の要旨」について、事務局から資料のご説明をお願いいたします。
文化・交流課長	それでは、資料１をご覧ください。前回、第２回の文化・芸術振興審議会で出た主な意見を抜粋いたしました。１４件ほど記載しております。そのうち幾つかご紹介をさせていただきます。 初めに「レガシーを感動（体験）と捉え、子どもたちに感動（体験）の場を提供していく」「音楽や演劇などさまざまな文化活動を通して、被災地と連携したレガシーを残していく」「杉並公会堂、杉並芸術会館、日本フィル等、杉並が潜在的に持っているハードとしての資産と、そこで行われているソフトとしての資産。これらを連動させて、杉並独自の文化プログラムを実施していく」「一番の「おもてなし」はオリンピック・パラリンピック競技大会をいっぱいにすること。区内の児童・生徒などを中心に「杉並応援団」を結成し、母国から応援に来られない国の方々にかわり「応援団」を派遣するなどの取り組みをしたらどうか」といったようなご意見をいただきました。記載の内容については、目を通していただければと思います。
会長	どうもありがとうございました。 前回の審議会で、皆様から色々なおもしろい意見、通り一遍でない意見、この機会を生かして杉並らしい取り組みをしたいという意欲あふれた意

	見をいただいたと感じていましたが、それがここにうまくまとまっていると思います。見てみるとキーワードがあって、１つは「子どもたち」「育成」「感動（体験）」、それから杉並区からの発信を利用するなど、幾つかキーワードが拾えていけるように思います。 　これらの要素を取り込みながら、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、区独自の取り組みを考えていくということで、その素案として資料２をまとめていただきました。
	（２）　東京２０２０大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ）の提示
会長	引き続きまして、資料２について説明をお願いいたします。
文化・交流課長	それでは、資料２の説明をさせていただきます。皆様からいただいたご意見を参考に作成いたしました。これをたたき台にして、本日再度皆様のご意見をいただき、ブラッシュアップしていきたいと考えております。 　まず「東京２０２０大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ）」の１点目として「文化・芸術活動助成金事業の活用」です。現在、区では区内で行われる文化・芸術活動事業にかかる経費の一部を助成することで、区民の文化・芸術活動への参加や鑑賞機会の拡充を進めております。この助成金は、「文化芸術活動事業」「企画提案事業」「大会等参加支援事業」の３つのプログラムを展開しており、今後東京２０２０大会に向けた文化プログラムの取り組みを支援していくために、「企画提案事業」のテーマにもう１つ、「（仮称）レガシーの創出に向けた新たな文化芸術の創造～杉並から世界へ文化を発信～」を追加していくとしております。下の方をご覧いただきまして「企画提案事業」の現在のテーマは「子どもたちの想像力と思考力を育む事業～文化・芸術を通して世代間交流を～」としております。このほかに来年度からこの文化プログラムの取り組みの支援として追加をしていきたいということです。募集する事業の限度額は、１事業１５０万円程度を想定しております。実施時期は、平成２９年度の第２次の募集からとし、７月に募集を開始。その後選定し、１０月１日から３月３１日に行われる事業を対象として募集をする予定です。 　続きまして、裏面をご覧ください。 　２点目は「すぎなみ戦略的アートプロジェクトの活用」です。これは２年前から杉並区がＮＰＯと協働事業として実施をしている事業です。その事業を活用して、「和文化発信プロジェクト」を始動していこうということです。「日本文化の再認識と発信」を目的に実施します。「和文化」をテーマとして、点在する「まちなかギャラリー」を、統一のテーマによる企画で結びつけ、効率的に「和文化」を見学・体験できる機会とし、予算額を１５０万程度見込んでおります。内容は、同プロジェクトに参加するアーティストが、中杉通りの「まちなかギャラリー」を中心に「和文化」をテーマにした企画展を実施するというものです。実施時期は、阿佐谷七夕祭りの時期にあわせた、８月初旬から２週間程度を考えております。

	続いて、「アートサポーターの育成」。アートをより身近に感じていただくきっかけづくりとしまして、区の人材養成講座であります「すぎなみ地域大学」にアートサポーター養成講座を開設する予定です。講座では、アートの歴史、作品鑑賞のポイントや写真の撮り方などを学べるようにして、講座修了後は協働事業のサポーターとして活動していただくとともに、区の助成金対象事業を区民モニターとして鑑賞し、その評価を助成金審査に反映させるなど、講座で学んだ知識を生かすことができる場の提供を目指しております。時期は、５月に開講し、４回程度講座を開催する予定です。 ３点目、「国内外へ杉並文化を発信」ですが、交流自治体で活躍する若手アーティスト、特に「被災地との連携」を視野に、交流自治体で活躍する若手アーティストを区内に招聘して企画展を行うとともに、区内若手アーティストを派遣するなど、相互交流を目指すものです。 ②といたしまして「ＥＸＰＥＲＩＥＮＣＥ　ＳＵＧＩＮＡＭＩ　ＴＯＫＹＯ」との連携。「日本の文化の再認識と発信」を目的に実施するもので、産業振興センター所管の「中央線あるあるプロジェクト」にて運営しております「ＥＸＰＥＲＩＥＮＣＥ　ＳＵＧＩＮＡＭＩ　ＴＯＫＹＯ」に「文化」のページを追加し、積極的に杉並の魅力を発信してくということです。ここでプロジェクターにてご紹介をさせていただきます。
事務局	こちらは、日本語、英語、ハングル、中国語、北京語等に対応しておりまして、中央線の区内の４駅を中心に紹介をしています。特にこのサイトでおもしろいのは、実際に外国人が区内を歩いてこんな体験ができるよということを紹介している点です。実際に体験したことを自身の言葉でまとめてあり、どの位費用がかかるのかというのを日記感覚でまとめています。１カ月で約３，０００ヒット、３，０００人が閲覧しているということになります。区内の外国人は約１万５，０００人弱。もちろん世界中の方が見られる形になっていますが、３，０００ヒットというのは、かなり多くの方が閲覧していると思います。 現在、大きなテーマが３つしかないのですが、ここに「カルチャー」の記事を追加して、このサイトを活かしながら、文化を上手に発信していければと考えております。以上です。
会長	３，０００ヒットというのは、どういうルートでそこへ入ってきている方たちなのですか。
事務局	これは、産業振興センターが所管の委託事業ですので、そこまでは不明です。
会長	こういうサイトがありますよという告知はどうなさっているのですか。
事務局	実は職員でもまだ知らない者がいるほどで、そこも含め、文化もタイアップしながら上手に発信していければとは考えております。
文化・交流課長	では、次のページの４番目として「『なみじゃない応援団』の設立」です。前回のご意見の中の１つにありましたように、「次世代の育成」「日本文化の発信」を目的に、母国から応援に来られない国々の方々にかわり、

	杉並区が応援団を派遣する。応援団は区内の児童・生徒等を中心に結成し、応援にあたっては、事前にその国のことを学ぶことはもちろん、選手等との交流を通して、異文化理解・国際理解に努めていくことができる体制を構築していくというものです。 　最後に「『すぎなみ文化プログラム公認マーク』の作成」ですが、こちらの実施時期は未定です。「大会気運の醸成」を目的に実施をするもので、オリンピック・パラリンピック認定マーク、応援マークの使用は承認手続が非常に煩雑で時間もかかるため、区が応援する文化事業について杉並独自の認定（応援）マークを作成し、文化プログラムとして承認、応援をしていくといったことをイメージしているものです。 　簡単ではございますが、以上です。
会長	どうもありがとうございました。 　前回の取りまとめをしていただいて、仮の具体案という形でまとめていただきました。 　今日は、これについて１項目ずつ検討して、さらにブラッシュアップした案へ持っていきたいのですが、何分にも盛りだくさんですので、１つずつ見ていきたいと思います。 　まず、最初の「文化・芸術助成金事業の活用」。従来杉並区では文化・芸術助成金という制度をつくりまして、年間１，０００万円の予算で運用しております。この審議会の作業部会で審査をして助成をしているのですが、その助成金の枠の中に「企画提案型事業」という、大型のテーマを設けて、それに応募していただくという取り組みがありますが、これまでのテーマに加え、新しい形で助成金を活用して何かできないかということになると思います。 　ここに書かれていることは、「レガシーの創出に向けた新たな文化芸術の創造～杉並から世界へ文化を発信～」ということになっているのですが、１つは事業の継続性、この助成金と絡ませることによって継続性を担保するということ。それから、もう１つはそれを発信していく仕組みを新たにつくっていく必要があるのではないかというようなことだと思うのですが、事務局の意図はそれでよろしいですか。
事務局	はい。
会長	それでは、ちょっと委員の方々からご感想を伺いたいのですが、自由討論に入る前に、まずは、部会で以前から審査に携わっていただいている谷原委員から、この取り組みについて何かお感じになること、あるいはこういうふうに発展させたらというようなご意見があれば、伺わせていただければと思うのですが。
委員	そうですね。非常に前回の意見を受けて、各パートに分けての要素が盛り込まれているなという印象があるのですが、新規の企画提案の件ですが、実際今も１５０万円の魅力的な企画提案にもかかわらず、応募件数が前回は１件というような内容でしたし、満額以下の金額しかオーダーさ

	れていなかったことを考えますと、この７月募集の時期、そして１０月１日から実施というと、かなり企画を練る時間が制約されます。こういったものの募集が７月に始まるよということと、趣旨説明を既存の団体、新規の団体に周知をどう図っていくか。応募が少なければ……。
会長	もったいないですよね。
委員	もったいないなという印象は受けました。
会長	ありがとうございます。 では、逆に助成金を活用される側にいらっしゃる後藤委員から、例えばこういうのができるとか、今、谷原委員もご心配になったと思うのですが、使い勝手等でこんな配慮をして欲しいとか、もしご意見があればちょっと伺わせてください。
委員	期間が厳しいですね。今年の７月に募集を開始して、それまでに、「こういうことがありますよ」と周知し、応募側もかなり早く取り組まないといけない。
会長	そうですね。
委員	準備期間や調整が、新たに始めるに当たっては必要です。
委員	そうですね。それと、色々なことをやるには、場所や日にちの問題があるので、結構厳しいですね。例えば我々がやろうとしたら、これではかなり難しい。時間的な問題があります、先ほど説明受けた時、次の年なのかなと思ったら今年なので……。
会長	その問題あるかもしれないですね、本当にリアルな問題として。
委員	３月までに実施となっており、それなりの期間はあると思うのですが、プランニングを考えると、ダイナミックに予算を使って企画提案を展開するには、やはり企画する準備期間が、少ないという印象を受けます。
会長	米屋委員、どうでしょう、その問題で。常にやっぱり助成金の場合に、応募と、それから採択の結論が出る期間と、それから実施期間の問題がある。せっかく助成金があるのだけれども、それで使えないというケースもあったりすると思うのですが。
委員	年度内に募集から実施までというのはかなり厳しいと思うのと、これに採択されなくてもやるのだと、規模を縮小してでもやるのだという覚悟がないと、多分応募できないでしょうし、借金してもやるのか、それとも、取れたらやるけれども、取れなかったらやらないというところを想定するのか、それによってかなり違ってきてしまうという気がします。 ただ、私もこの企画提案という枠組みを知らなかったのですけれども、もう少し芸術関係に告知をすれば、逆に殺到してしまうかもしれないとは思うのです。一連のこういったレガシーということを考えますと、やりたい人の意欲につながるだけでいいのかというと、もう少し杉並区がこうなりたいとか、こういう方向に持っていきたい、それについてどういう提案をしてくれますかという、目指すべきところのイメージを、漠然としたも

	のではなく、固めないと、何でも企画提案があれば採択されることになってしまうと、それもまた変な話ですし、その目指すべきところをもう少し浸透させないといけないのかなと感じました。
会長	その他、何か。ほかの委員で。
委員	私も助成金の審議に参加しまして、その件数が少ないという思いがあります。谷原委員と同じなのですが、告知の方法、認知度を広めるにはどうしたらいいのか。知っていても参加しやすくするには、期間の問題があります。正直申しますと、僕は助成金のことは全く知らなかった。杉並で仕事をしていても知らなかった。この７月に募集を開始して、１０月から年度内の実施が対象ということになると、やはり、もう何年もトライしていた団体しか応募できないというのが現実です。ほかの助成金も、何回か応募している人たちが多かったような気がする。だから知っている人は知っているけれども、知らない人は全然知らない状況があるのではないでしょうか。 この２つの大きな問題。告知期間と告知をいかに広げるかという問題があると思います。
会長	ありがとうございました。最後にもし時間があれば、この問題については、もう少し話し合いたいと思います。 それでは、その２つ目の「すぎなみ戦略アートプロジェクトの活用」に移りたいと思います。これも現在実施しているプロジェクトの中で、「日本の文化の再認識と発信」を目的に「和文化」をテーマにした、体験・見学できる機会をつくりたい。既に、阿佐谷でずっと行われている七夕祭りの時期に合わせてプロジェクトに参加するアーティストたちが、中杉通りのまちなかギャラリーを中心にして、和文化をテーマにした企画展を実施するというような内容です。これも大体１５０万ぐらいの予算ということで、少し見込みがついていると考えてよろしいでしょうか。
文化・交流課長	現在、参考資料としてお手元にお配りをしております、この水色の「まちなかギャラリーマップ２０１６」が一昨年から協働提案事業として実施しているものです。杉並区にある様々なギャラリーや店舗といったところを展示場所として紹介し、広く活用して見ていただくということをしている中で、今回、この「和文化発信プロジェクト」を、期間を阿佐谷の七夕の時期に合わせて実施していきたいと、今考えています。
会長	たしか、前回の審議会の席上で中杉通りのお話が出て、それを受けての企画案だと思うのですが、坂根委員からこれについて何かご意見はありますか。
委員	これは、対象は誰に向けたものですか。
文化・交流課長	具体的に対象というのは、広く一般の方々に見ていただくということです。外国人の方も当然入りますし、子どもから大人まで、様々な人に見ていただければと思っております。

委員	どういうものを展示するかというのもこれからということなのですか。
会長	そうですね。ですから期間であるとか、内容をどうするかというあたりは、大きな枠組みとしてそんなことを考えたらどうかということだと思うのです。ここでポイントとなるのは、１つは中杉通りという具体的な地域性が上がっていることです。そのことについてはどうですか。中杉通りと和文化という結びつき……。
委員	そうですね。中杉通りからちょっと入ったあたりも含めての中杉通りならばいいかなと個人的には思います。中杉通りだけですと少しもったいない。もっと具体的な日本のまちの中、住宅地や伝統的な住まい、そんなものも体験できる。外国人の視点からすると、ギャラリーの中だけではなくて、そんなようなものも体験できると面白いと思います。
文化・交流課長	先ほどのギャラリーマップの中の、阿佐谷地区のマップをご覧いただくと、中杉通りだけではなく、通りを中心に幾つかありますので、今ギャラリーとして登録しているところを活用して、点を線で繋げ和文化の発信をしていければと考えています。
委員	全体的に私も、米屋委員と同じ意見で、区としてどうありたいのかという、全体のコアになるものがあって、そこから枝が伸びる。幹として杉並の文化を、こういうふうなことをやっていきたいというのがあって、そこに枝として今、色々なものがくっついてくる。こんなこともできるよ、こんなものもあるよという、こういう活動をぜひ皆さんしてくださいというふうに、何か呼びかけていけたらいいのかなと思います。
会長	今、坂根委員からもありましたが、ある意味で絞り込みですよね。和文化というだけではなくて、それにどういうフォーカスを当てるか。このような視点でこの企画を膨らませるとしたらどういう可能性があるか、中村委員、少しお話をいただければと思うのですが。
委員	うまくお答えになるかわからないのですけれども、確かに坂根委員の言われたとおり、レガシーということをいうのであれば、やはりそこに、哲学というか理念というか、しかもそれが杉並区という地域性を生かしたものであるものが何か欲しいと思いました。各論としてはそれぞれ面白いと思うのですけれども。 実は、第１回の時に言い忘れてしまったのですが、私が昔、調べた人に、新居格という人物がおりまして、戦後初の杉並区の民選区長なのですね。もともとは戦前からアナキストだった人ですが、１９４７年だったかな、民選の初の区長として杉並区長に当選した時に彼の掲げたのが「世界の杉並区」というのです。杉並から世界に文化を発信するということを言っているので、まさに先ほど議論になっていたであろう、この企画提案の２番のタイトルそのものを１９４７年の段階で既に掲げているのです。 しかも、その掲げている中身が、文化といっても、やはり狭い意味での文化・芸術だけではなくて、まさに街並みであるとか、具体的にこういう花をこの通りに咲かせたいとか、色々と言っているのです。

	このような歴史的背景を踏まえて、この辺にうまく起源を持たせた形で杉並区のまちづくりや文化のありようというものを発信してくことが、レガシーに繋がり、幹から枝葉が伸びていく感じにできないかなと思った次第です。
会長	今、お二方にご意見を伺ったのですが、そのほかに、このプランについて、こういうところを留意した方が良いとか、この辺をつくり変えたほうがいいのではないかというようなご意見があれば、少し伺わせていただければと思います。
委員	和文化というのをどう捉えるかですけれど、日本人は漠然と明治以前に成立したようなものが伝統文化と、２分法で考えてしまいがちです。しかしトラディションというともっと幅広いですし、それこそ海外から見ると今のアニメも和文化だと捉えられる訳で、和文化をどう定義するのかというのは、そこから色々な視点が盛り込めるのかなと思います。古いルーツを持っている文化というふうに矮小化しない方がかえっていいのかなと。よくある伝統の再発見ではなく、むしろ日本再発見ぐらいのほうがいいのかなと私としては思うのです。
会長	和文化ということで花柳委員、何かご意見ございますか。
委員	杉並はやはりいいところです。こんなにいいまちはないのです。だから、それで生活して、稼ぐだけ働いて、一生を終わるだけではつまらない。この杉並区は生活を楽しむまちなのです。それに自信を持ってみんながいれば、外国の方たちが来た時にも、いつでも対応ができる体制に杉並区はなっていると思います。杉並区は生活都市ですから、やっぱり横のつながりと、生活の楽しさというのは一番大事だと私は思っております。杉並区というのは、生活を楽しみながら、歌って踊って、素人でもプロでもみんなが楽しめる下地が既にあるわけです。これからは、そこに杉並区に来た人も楽しみ、杉並区に行ってみたいなというエッセンスが加われば良いと私は思っております。杉並区は豊かな心を育て、育むことができるまちです。子どもたちも、学生も、みんなが歌って、踊って、感動して、拍手をして…。「杉並区に住んでいて幸せだな」と感じられるまちなのです。それを発信できればと、私は思っております。
会長	ありがとうございます。今の花柳委員のご意見の中で、とても貴重なところが１点あったと思います。 これからこういう催しものを実施していく時に、まず区民の中に広げていく。同じ発信といってもまずは区民へ発信し、広げていくことが大切で、それから外へ広げ発展していく。この２段階が必要だと思うのです。例えば、こういうアートギャラリーをやる場合でも、その辺を少し見極めていくということが、キュレーションをしていくときの１つポイントになるかなと思います。 何となく漠然としたテーマで、何となくみんながやっていてもなかなか盛り上がらない。アート系のプログラムにはやっぱりキュレーションがす

	ごく大切で、しっかりとしたキュレーターが立ってやらないといけない。そのことが次の「アートサポーターの育成」ということにちょっとつながってくると思うのですよね。もちろんこのアートサポーターというのは、美術系だけではないと思うのですが、現在の活動について、現状どのような役割を担っているか、もう一度ご説明をいただいて、委員の皆さんで共通認識を持ちたいと思うのですが、よろしいでしょうか。
文化・交流課長	このアートサポーターは、先程ご説明した協働提案事業の中で、ギャラリーの発掘や月に１回行われるアートミーティングで企画の提案などをしていただいております。今後はもう少し活動を広げ、作品の見方や写真の撮り方を学んで、助成金対象事業へ区民モニターとして鑑賞に行っていただくことを想定しています。現在、助成金対象事業は全て区職員が見に行って確認していますが、このサポーターにもそれを担っていただき、その評価を審査に反映していきたいと考えております。
会長	ありがとうございました。 現在活動しているサポーターを単に充用をするのではなく、区民の方々に積極的にアート活動に関わっていただく場をつくり出していくということでしょうか。その前提として知識を学んでいただく場を提供する。 菊地委員は杉並公会堂でさまざまな市民参加型の活動にも取り組まれていらっしゃると思うのですが、市民参画とかその辺のあたりをあわせて、このアートサポーターの育成について何かご意見があれば。今は美術系で言ったのですが、音楽系とか、どういう市民参画の可能性があるかというような切り口でお話をいただければと思います。
委員	そうですね。難しいですね。音楽の場合は、例えば今公会堂でやっている荻窪音楽祭や杉並文化村は、その方たちが中心となり、周りを巻き込みながら発信をしていこうということでしょうか。実は、私も荻窪音楽祭の運営委員会に入っているのですが、だんだん高齢化というか、皆さんやっぱりお仕事を抱えながらやっているので難しいです。荻窪音楽祭もまちの中にサポーターを増やしていこうということをやっているのですが……。 こういった事業をやっていただいてサポーターをどんどん増やしていただくと、運営側も助かるのではないかという気がします。音楽のお話しをしましたが、分野は違えども音楽も芸術アートであり根底は一緒ではないかなと思います。
会長	ありがとうございました。 米屋委員は、たしかこの間、文化クラブの創設というようなご意見をいただいたと思いますが、この「アートサポーターの育成」にもう少し力を入れましょうという、事務局案について、ご意見あるいは、アドバイス等あれば、ちょっと伺わせていただければと思います。
委員	講座を終えれば全員がアクティブに活動できるかというと、そうでもないでしょうし、本当にボランティアマネジメントはとても難しい。ボランティアを全部無償化にすると問題が生じてしまいます。交通費程度は弁済

	しますよとか、ちょっとした有償ボランティア、専門性を持った方を活用していくということが今後は必要なのではないかなと思います。 　しかし一方で、では一体誰が「この人は専門性が高い」とか「この人はだめ」を評価するのかという問題が出てきてしまう。市民の力を活用していくとしても、幾つもハードルはあるのかなと思っています。無償ですと、最初はよくても、やはり専門性の高い活動を継続していくというのは結構厳しいのかなと思うので、コアになる方はある程度有償の人をつけないと難しいのではないか。私の知っている範囲ではそう感じます。
事務局	ご指摘の部分に関しては、戦略的アートプロジェクトで予算を組んでいまして、無償ボランティアという形ではなく、例えば、モニタリングに行ってくださった方、イベントの確認に行ってくださった方には謝礼を払いましょうと、予算を確保しています。
会長	米屋委員からご指摘にあったボランティアマネジメントに対する経費を見なければいけないという問題。日本ではボランティアマネジメントという概念がまだまだ確立しているとはいえず、現場で経験主義的に持ってしまっています。「アートサポーターの育成」にあたり、それを生かすためにやっぱりボランティアマネジメントについての調査とか研究について、多少なりとも予算があると少し実質的なものになるというご指摘だったと思うので、ちょっと余計な指摘をさせていただきました。 　そのほかに何か、すぎなみ戦略アートプロジェクトの２本の柱について、もう一度振り返ってみて、何かご意見とかおありになれば。
委員	アートサポーターですが、この専門性が高く、かつ核になってアート活動のリーダー的な存在として修了後も活躍してもらうという提案。これは、いわゆる大人をターゲットとしていると思うのですが、ちょっとおもしろい事例が福島にありまして……アートサポーターを子どもたちがやっているという事例です。地域アートをもちろん創作アーティストの人からレクチャーを受けて、子どもたちがアートサポーターとしてその作品を紹介をするということで、まさに次世代のアーティストといいますか、育成をかねて、子どもたちがアートサポーターになっていくというような取り組みをやっているまちがありました。何か、そういうことも少し要素の中に、これとは別の枠にはなると思うのですけれども、アートサポーターというのに子どもの存在というのがあってもいいのかなというようなことをちょっと感じました。
会長	ありがとうございました。非常におもしろい事例の紹介と重要なご指摘だったと思います。 　それでは、第３の「国内外へ杉並文化を発信」。どちらかといえば外へ向かっての発信でしょうか。 　復興というキーワードを考えたときに、確か交流があるのは福島県南相馬市だったでしょうか。非常に重要な外部との連携が行われているわけですが、この項目の中で、まず、第１の項目の「交流自治体で活躍する若手

	アーティストの招聘」ということが書かれているのですが、これは何か具体的な事例とかがおありになるのでしょうか。
文化・交流課長	実は、まだ各交流自治体で活躍というか、活動しているアーティストを把握しているわけではないのですが、現在区内のあるアーティストの方から例えばその南相馬市にある木材を使用してアート作品を制作し、その制作過程で南相馬を訪れたり、展示や販売を相互にできないだろうかという提案をいただいています。 これを少し広げた形で、南相馬に限らず、杉並区の場合は８つの国内の交流自治体がありますので、そういったところとのアーティスト同士の相互交流ができれば、ということを漠然と考えているところです。
会長	ありがとうございます。やはり、外へ広げるといっても、漠然と広げるのではなくて、そういう具体的な地域があるということはすごく強みですし、そこからさらに点を広げていって面にしていくというような考え方はとても重要だと思います。 ちょうど復興事業にもかかわっていらっしゃったので、後藤委員に伺いたいのですが、そういう時にこんなことに目を向けたらどうかとか、何か、この全般的にこの発信で、まず被災地との協働をやりたいということについては何かご意見はございますでしょうか。
委員	やはり被災地も５年を過ぎ、今６年目ですか、時間がたってくるともうだんだん薄れてきている。この間ある新聞記者の方から、もう話題が尽きて、要するに被災地に行っても、今、あそこから何かを受け取ってみんなに発信していくものがどんどんなくなってきているので、関心も薄れてきていると伺いました。このような時期に、２０２０年のオリンピック・パラリンピックに向けどんどん進んで行ってしまうと、多分その時期にはもう被災地のことなんか忘れられてしまうのではないかと言われています。 南相馬をはじめ、日本全体でオリンピックに向けてという雰囲気はなかなかつくりにくのではないかと思うのですよ。 だから、それを我々例えば日本フィルでしたら、子どもたちにオリンピックというのはすごく夢があって、それを何か実感させてあげたいような、そういうことをできればなというふうに思っているのです。 具体的となるとわからないのですが、日本フィルは音楽をやっていますから、例えば南相馬の吹奏楽とブラスバンド、杉並区の学校とですが、開会式のオープニングのファンファーレのときに同じファンファーレを一緒に演奏するとか、何かそういう企画がいいかなと思うのです。
会長	もう１点、先ほどちょっとパソコンで紹介していただいた「ＥＸＰＥＲＩＥＮＣＥ　ＳＵＧＩＮＡＭＩ」との連携で言われていた「発信力の強化」。特に多言語表現の発信についてはこの間ヤマザキ委員からご指摘があったので、今ちょっとご覧になったことを含めて、この「ＥＸＰＥＲＩＥＮＣＥ　ＳＵＧＩＮＡＭＩ　ＴＯＫＹＯ」を生かした発信というのについて何かご指摘、あるいは、多少こっちの方向へブラッシュアップする必

	要があるのではないかということをお伺いさせてください。
委員	１つ話が戻り、被災地との交流・連携のことですが、今、問題になっていることは……かつては本当にもう大変な状況のところに、とにかく行って音楽を提供していたのでが、今は、ばらばらになったコミュニティを再生する拠点がぽつぽつとできていて、比較的活性化しているようなところもあります。一方、やはり忘れられていってしまっているという認識がすごく、広くあるのです。まだ東北のほうにはやることがいっぱいあるではないか。でも、ここまで来ては、もうオリンピック反対といってもいられない。となると、相互交流がすごく大事だと思うし、現地としてはやっぱり人に来てほしいという部分があるわけです。そういう企画・・・ブラスバンドの支援や造形家でもいいし、パフォーマーでもいいのですが、相互交流の何か企画が設計されるといいのではないかなと思いました。 それで、「ＥＸＰＥＲＩＥＮＣＥ」のほうですが、とにかく杉並や東京はもうコンテンツのかたまりです。コミュニティ活性化のイベントだらけで、もうてんこ盛り。「ここは文化の地域ですよ」と発信しても、そのとおりなのですが、花盛りに見えてしまいます。
会長	今のヤマザキ委員のお話とちょっと関連すると思うのですけれども、地域づくりにおいて地域間の情報発信というのはどういう意味を持っているのかというようなことについて、少し中村委員のお考えをお聞かせいただけますか。
委員	被災地・南相馬のアーティストと杉並区のアーティストがお互いに公演し合うというようなこと自体は、具体的に取り組めることとしていいと思います。ただし、何かそこに、今の情報発信にしても、共通テーマといいますか、もうちょっというとコミュニティ課題を何か共有できるような、将来協働事業に発展させられるような、テーマを掲げられると良いと思います。それを何か目に見える形で発信できれば、杉並区と被災地との間でこういうことをやっていますという、他地域に対しての発信にもなるし、うまくいけば、「ああ、そういうやり方があるのか」と、いい意味で真似してもらえるわけですから、何かそういうテーマ性を持たせたいなと。 そういうときに、さっきアートサポーターのところでも言おうかなと思っていたのですが、名称にこだわるわけではないのですけれども、サポーターというとどうしてもサポートする人、応援する人みたいな感じに受けとめがちなので、最近の流行りは「コミュニケーター」という言葉をよく使うようになっています。世代も本当にシニアの方から、さっき話題に出ていた子どもに至るまで、いろいろな人たちが、いわばワークショップを重ねながら、アートというものに親しむ中でコミュニケーションを深めていくというような形なのです。この若手アーティストの交流にコミュニケーター的な人が入って、コミュニティ課題を発掘していくなどのプロセスをうまくつくる。これは、誰かコーディネートする人が必要ですけれども、そういうことがやれると、割とよくある単なる交流というよりは、

	目的をちゃんと持った交流であり、そこにコミュニケーションがきちんと生まれているなということが示せるかなと思っています。
会長	ありがとうございました。 では、次の４の「なみじゃない杉並応援団」に移りたいと思います。これは、もともと板倉委員のご提案そのものなので、もう少し、もう一度板倉委員のイメージをお聞かせいただいて、それを生かしながらまた案を練っていきたいと思うので、お願いできますでしょうか。
副会長	これが可能かどうかというのは私としてもよくわからないのですが、ただ、子どもたちを入れやすいかなというのは感じました。応援ですから、子どもたちのみならず、例えば、車椅子に乗っていらっしゃる方やお年寄りの方も旗を振ればいいので、ご一緒にできるのではないか。それぞれ、老若男女、そのできる限りの応援ができればいいのではないかと思うのです。そういうのを学校に呼びかけて、生徒会に呼び掛けて、若い子たちを組み入れていくということができたらいいなと思います。 もちろん応援する国とは事前に調べ、自分たちの言葉で交流し合うべきだと思うし、勉強しなければいけない場合は、学校の先生にも頑張ってもらい一緒に勉強する。勉強して会うということと、勉強しないで会うのとは全然違っていて、勉強して会って話をすると、やはり感動がとても大きいのです。そういう感動を子どもたちに味わって欲しいと思います。
会長	ありがとうございました。 最後に、私の個人的意見をつけ加えさせていただきます。オリンピックはどうしても「日本頑張れ」だけになってしまうと思うのです。そんな時に、やはり子どもたちが、いろいろな国を応援しようという体験をすることはとても大事だと思うのです。ただこれは、本当に文化・交流課だけではちょっと実現できない要素を持っています。でも、やはりせっかくいい事業なので、ぜひ関係者と調整していただいて、何とか実現してほしいなと思っています。 では、最後に「『すぎなみ文化プログラムマーク』の作成」ということですけれども、これは、杉並区独自の取り組みということになると思います。国や都のマークを使うことは大変なことだけではなくて、先ほどヤマザキ委員からもご指摘があったように、杉並区はこのオリンピックとかパラリンピックを機会にしてこういうことをやるのだというような独自性を主張するというためにも、何かいいシンボルがあると、「なるほど、そういう機会でもこういうことができるのか」というような提案型の意味合いがあると思うのです。独自に杉並区の動きを外へ発信していくという役割を持っていると思うのですが、皆さんからもしご意見があれば伺いたいのですが、いかがでしょうか。 デザイン上の問題というのもありますし、心配なのはいろいろなマークがこれから出てくると思うので、マークだらけの事業になってしまうと大変なのですが、具体案に持っていくためには、これは早く取り組まないと

	結局意味がないと思うのです。今はいろいろハードル高いですけれども、そのうちだんだんハードル低く、どんどん使えといようなことになってくると思うので、その辺で何かご意見聞かせてください。
委員	シアターアクセシビリティネットワークというＮＰＯをつくっていらっしゃる方がいて、代表の方は耳が聞こえない方なのです。でも、お芝居も楽しみたいというので、積極的に耳が聞こえない人、あるいは目の見えない方にアシストして鑑賞を助けようという活動を始めていらっしゃるのですが、今まで芸術団体とか文化団体は自分がやることに一生懸命で、鑑賞者をどう広げるかというところがちょっと手薄になっていたかなと。 オリンピックは、このような取り組みをもう少し広げるチャンスとして捉えると、今まで手薄になっていた「鑑賞者を引きつけるためのアシスト」つまり放っておくと鑑賞しにくい人たちへのアプローチ、巻き込んでいくという視点、そういったようなことに取り組んでいるところを評価していく、そういう方向性が１つあるのではないのかと思います。
会長	ありがとうございます。 まだ、多少時間がありますので、もう一度振り返って、少し自由にご意見を伺わせていただければと思います。
委員	２つほどあります。４番の「なみじゃない応援団」、なかなか応援に来られない国々の大使館と組んで、早めにいろいろ一緒にやっていくということであれば、かなり協力してもらえるのではないかなと思います。 全体的には、この取り組みのコアになる、幹になる部分には、「子どもたち」や「日本文化の発信」というようなことが少なくともあったと思うのですが、いずれもバラバラに、あれをやってこれをやってというよりも、赤い糸ではないですけれども、全部に共通するものとしてつなげていけたらいいのかなというふうに思っています。例えば、いまお話しに出てきた公認マークも子どもたちから募集したらどうかなと。 杉並としてこういうことをオリンピック・パラリンピックに向けてやっていこうとしていて、その基本的な考えを子どもたちにもわかりやすくまとめて、子どもたちと一緒にマークをつくっていくとか。 「子どもたち」がキーワードであるならば、できる限り、いろいろなところで子どもたちを巻き込んでいって、まだ何年も先なので、少しずつかかわることによって、より自分たちも何かできることがあるのだというような、何かそういう育成につなげていく。国際理解とか、異文化、障害を持った人たちだとか、自分たちと違う人たちとのかかわりというのを少しずつ深めていくような、何かそんな活動に全てをつなげていけたらいいなと思いました。
会長	確かにマークをつくるためには、この全体を貫く何か理念をつくらないとマークはつくれませんよね。それは「未来」であるかもしれないし、「やさしさ」になるかもしれないし。何かそれが１つ見つかると少し見えてく

	るものがあるのだと思います。
委員	マークについて、あえて反対の意見を言います。お伺いしたいのですが、これは文化・交流課の助成金事業を推進するためのマークとしたら、もしかしたらほかの課も、杉並区の庁舎の中からいろいろなマークが出てくる懸念というのはないのでしょうか。例えば、この２つのチラシには既に文化・芸術活動助成金のマークが入っていますけれども、これ、街のあちこちで見かけて、ピンとくる人が現在どのぐらいいるだろうか思いますし、新しいマークができたらこれはなくなってしまうのでは。インパクトとして、パッと見ただけで、「杉並区の文化・交流課がやっていて、助成をしている事業だ」と思うかどうかというのに、少し疑問があります。先ほど会長からもマークの乱用のお話しがありましたが、本当に要るのかなと思うところではあります。
事務局	助成金事業のマークは引き続き使用していきます。 今回のご提案は、後援事業、区の後援をとっている事業に対して、杉並区として応援している事業ということを PR するものであり、杉並区として付与していくことを考えているところです。
委員	例えば、まちづくり推進課のオリンピック関係の助成であったり、学校支援課の後援であったり、全部にという意味でしょうか。
事務局	区として　オリンピック・パラリンピックに向け、区民の文化・芸術活動を応援していく姿勢を見せるイメージです。
会長	そのほか、ほかのことについてでも結構なので。
委員	すみません。初歩的な質問になると思うのですが、１番の、新しく企画提案事業に追加するというのは、これからオリンピックまでということですよね。
文化・交流課長	今回提案しているのは、２９年度の後期ですが、オリンピック２０２０年が過ぎるまでやっていこうかと思っています。
委員	わかりました。
会長	ほかには。ご質問等でも結構ですので。
委員	マークのことなのですが、「なみすけ」は全然資料に現れていないのですが「なみすけ」はどこに行ってしまったのですか。「なみすけ」が旗を振っているのもいいのではないかと僕は思います。せっかく杉並区には「なみすけ」がいるのに、なぜ出てこないのかなと、ちょっと質問なのですけれども。
文化・交流課長	「なみすけ」は、イメージしていませんでした。新たに文化プログラム、杉並区がオリパラに向けて取り組んでいく事業に、何か新たなものをつくってみたらどうかということで、ご提案をしているところです。
会長	「なみすけ」には例えば使用は、勝手に色を変えてはいけないなどあるのですか。
文化・交流課長	使用上ありますが、新たにオリパラに向けて新しいデザインをつくって

	いくことは可能だと思います。
委員	全く違うものを採択されるよりは分かりやすいかと。杉並区としての取り組みなのだというイメージをしやすいと思います。
会長	子どもが書いたなみすけとか。
委員	そっちのほうが私もわかりやすいと思います。
会長	ありがとうございました。 今日、またとてもいろいろ意見をいただいたのですが、幾つか要点があったと思います。大きなところでは、それぞれの取り組みにもう少し明確な絞り込みをした方が良いのではないかということだったと思います。 これから１つずつ取り組みを立ち上げていく時に、それぞれ固有の理念なり、共通する１本柱をつくった方が良いのではないかというご意見でした。 もう一度大変ご苦労をおかけするのですが、事務局に今日の意見を入れた案を再度まとめていただいて、次回それを確認して、審議会としての意見集約としたいと思うのですが、事務局はいかがでしょうか。
文化・交流課長	承知いたしました。
会長	では、よろしくお願いいたします。
	３　その他
会長	では、最後に議事次第の中の「その他」ということで、事務局から何かございましたらよろしくお願いします。
文化・交流課長	今日いろいろと意見をいただきましたので、その意見を踏まえ、本日のたたき台について少し修正を加えながら、次回４、５月頃にご提案をさせていただきます。そこでまたご意見をいただいて、最終的に取りまとめていくというようなことを考えておりますので、次回審議会の日程等につきましてご連絡を差し上げたいと思います。よろしくお願いいたします。
会長	この大きい枠組みは、今日で全く変わってしまうということはなく、この方向で少しブラッシュアップするということですね。
文化・交流課長	そうです。例えば先ほどの企画提案の期間の問題は、期間が短くて企画する時間がないというのはそのとおりだと思いますので、そういったところでちょっと工夫していきたいと思っています。
会長	では、枠組みは変わらないということですので、委員の方々にもできれば次回に、更に追加や、大胆な組み立ても、お互いにぶつけ合えるようにご提案いただければと思います。次回で最終的な結論を出すのではなく、もう１回最終案まで過程を踏みたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。 では、今日は他になければ終わらせていただきたいと思います。 そのほかに補助金審査等については。
事務局	現在、２９年度の第１次の助成金募集が始まっています。 こちらの審査を部会員の皆様に２月の後半から３月上旬にしていただ

	く予定です。こちらにつきましても、大変申しわけないのですけれども、お時間をいただければと思います。日程が決まり次第ご連絡をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。
会長	ありがとうございました。 それでは、委員の皆様から最後に、何かご質問とか、ご意見、言っておきたいこと、忘れたとか、ありますでしょうか。 それでは、どうも長い時間ありがとうございました。また次回よろしくお願いいたします。
	ー　閉会　ー　　（午後７時２３分）

平成 29 年 1 月 10 日
西棟 8 階第 9 会議室
午後 6 時～

平成 28 年度 第 3 回 杉並区文化・芸術振興審議会 次第

1　開　会

2　報告事項
（1）第 2 回杉並区文化・芸術振興審議会自由意見の要旨
（2）東京 2020 大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ）の提示

3　その他

【配布資料】
資料１　：第 2 回杉並区文化・芸術振興審議会自由意見の要旨
資料２　：東京 2020 大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ）

【参考資料】
・まちなかギャラリーマップ 2016
・すぎなみアートさんぽ 2016　イベントマップ
・すぎなみ地域大学　講座案内
・助成金事業のご案内（２件）

資料１

第２回文化・芸術振興審議会　自由意見の要旨

○ 「レガシー」を「感動（体験）」と捉え、子ども達に感動（体験）の場を提供していく。
○ 外国語での発信が必要。今までのような名所旧跡だけではなく、街並みのおもしろさや杉並にある資産がうまくリンクしていくような仕掛けを作る。
○ 音楽や演劇など様々な文化活動を通して、被災地と連携したレガシーを残していく。
○ 子ども達の目を海外に向けさせる。海外から杉並を見ることによって、杉並に住んでいてよかったと感じることができる体験をしてもらう。
○ 杉並公会堂、杉並芸術会館、日本フィル等、杉並が潜在的に持っているハードとしての資産と、そこで行われているソフトとしての資産。これらを連動させて、杉並独自の文化プログラムを実施していく。
○ 「こんなことに外国人の方が興味を示すのか」と驚かされることが多い。杉並にもたくさんあるのではないかなと思うので、区内在住の外国人と協力し、発見・発信していく。
○ 2020 年のオリンピックのレガシーの１つとして、地域に「文化クラブ」をつくってはどうか。
○ 一番の「おもてなし」はオリンピック・パラリンピック競技会場をいっぱいにすること。区内の児童・生徒等を中心に「杉並応援団」を結成し、母国から応援に来られない国の方々に代わり「応援団」を派遣するなどの取り組みをしてはどうか。
○ 地元企業と連携し、地域で埋もれているもの、歴史的に面白いもの、担い手が途絶えているもの等を発掘していきレガシーにつなげていく。
○ 文化芸術を通して例えば待機児童問題や環境問題などの社会的課題の解決に取り組んでいく。
○ 文化活動を地域で支えるという仕組みを定着させていく。
○ 子どもたちやお年寄りに、杉並に住んでいることの意味、杉並に住んでいて本当に良かったと感じ取られるような機会の提供を。
○ 子供たちが経験を通して自信をつけることができる機会を創出していく。
○ ソフトも大切だが、道標の整備などハード的なインバウンド対策も同時に進めていくことが必要。

資料２

東京 2020 大会に向けた文化プログラムへの取組（取りまとめ）

文化プログラムは、東京 2020 大会に一人でも多くの人が参画し（アクション）、東京 2020 大会をきっかけにした成果を未来につなげていく（レガシー）ため実施するものである。

区は、杉並が持つ独自の資源（取組）を活用した文化プログラムへの支援を行い、次世代の育成、新たな文化芸術の創造、日本文化の世界への発信を推進していく。

１）文化・芸術活動助成金事業の活用

区は、区内で行われる文化・芸術活動事業に係る経費の一部を助成することで、区民の文化・芸術活動への参加や鑑賞機会の拡充を進めている。

現在、「文化芸術活動事業」、「企画提案事業」、「大会等参加支援事業」の３つのプログラムを展開しているが、東京 2020 大会に向けた文化プログラムの取組を支援していくため、「企画提案事業」のテーマに「（仮）レガシーの創出に向けた新たな文化芸術の創造～杉並から世界へ文化を発信～」を追加。文化・芸術活動への参加、鑑賞機会の拡充と共に、次世代の育成、新たな文化芸術の創造を目指す。

【各助成事業の概要】

	助成 限度額	申込資格	内　容
文化芸術活動	100 万円	区内在住の方または区内に活動拠点を持つ団体	事業への助成ではなく、助成金の効果があると思われる項目に対し使途を指定して助成。書類審査。
企画提案	150 万円	区外も可能	事業助成。プレゼンテーションあり。区が提示したテーマに添った事業について助成。事業の『育成』に重点を置く。
大会等参加支援	国内 5 万円 海外 10 万円	区内在住の方または区内に活動拠点を持つ団体	対象大会等に出場し実績を残し、これから飛躍が期待される若手に対し、大会等への参加費用の一部を負担。

◇企画提案事業

【テーマ】

１：こどもたちの想像力と思考力を育む事業～文化・芸術を通して世代間交流を～

２：レガシーの創出に向けた新たな文化芸術の創造～杉並から世界へ文化を発信～

【募集する事業数と助成限度額】

現在：１事業　150 万円　　⇒　　新規：各テーマ１事業　計 150 万円

【時　期】

平成 29 年度第２次募集より

⇒10 月 1 日～30 年 3 月 31 日に行われる事業が対象。7 月に募集開始。

２）すぎなみ戦略的アートプロジェクトの活用

①「和文化発信プロジェクト」の始動

「日本文化の再認識と発信」を目的に実施。「和文化」をテーマとし、点在する「まちなかギャラリー」を統一のテーマによる企画で結びつけ、効率的に「和文化」を見学・

体験できる機会とする。

【予算額】

150 万円程度

【内　容】

阿佐谷七夕祭の時期にあわせ、同プロジェクトに参加するアーティストが、中杉通りのまちなかギャラリーを中心に「和文化」をテーマとした企画展を実施。

【時　期】

８月初旬から２週間程度

②アートサポーターの育成

アートをより身近に感じていただくきっかけ作りとして「すぎなみ地域大学」にアートサポーター養成講座を開設する。講座ではアートの歴史、作品鑑賞のポイントや写真の撮り方等を学べるようにする。講座修了後は、協働事業のサポーターとして活動していただくと共に、区の助成金対象事業を区民モニターとして鑑賞し、その評価を助成金審査に反映させるなど、講座で学んだ知識を活かすことができる場の提供を目指す。

【時　期】

5 月開講（計 4 回）

３）国内外へ杉並文化を発信　（随時）

①交流自治体で活躍する若手アーティストの招聘

「被災地との連携」の視野に実施。交流自治体で活躍する若手アーティストを区内に招聘し、企画展を行うと共に、区内若手アーティストを派遣するなど相互交流を目指す。

②「EXPERIENCE SUGINAMI TOKYO（エクスペリエンス 杉並 東京)」との連携

「日本文化の再認識と発信」を目的に実施。産業振興センター所管「中央線あるあるプロジェクト」にて運営している「EXPERIENCE　SUGINAMI　TOKYO」に「文化」のページと追加。杉並公会堂での日本フィルコンサートや座・高円寺で行われる公演に区内留学生等を招待。積極的に SNS で発信してもらうことで海外発信の強化を図る。　⇒ http://experience-suginami.tokyo/

４）「並みじゃない応援団」の設立（未定）

「次世代の育成」、「日本文化の発信」を目的に実施。母国から応援に来られない国の方々に代わり、杉並区が応援団を派遣する。応援団は区内の児童・生徒等を中心に結成。応援にあたっては、事前にその国のことを学ぶことはもちろん、選手等との交流を通して異文化理解・国際理解に努めていくことができる体制を構築する。

５）「すぎなみ文化プログラム公認マーク」の作成（未定）

「大会気運の醸成」を目的に実施。オリンピック・パラリンピック認定マーク、応援マークの使用は承認手続きが煩雑で時間もかかるため、区が応援する文化事

イメージ

業について杉並独自の認定（応援）マークを作成し、文化プログラムとして承認、応援をしていく。